

平成二十六年度卒業式式辞

ときはまさに梅の花が咲き始め、冬から春へと国際園芸アカデミーのキャンパスにも春の花の時期が始まるうとしています。

本日、ここに岐阜県立国際園芸アカデミーを卒業してゆく二十一名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

ご参列の保護者の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。

また、この度はご多忙にもかかわらず、岐阜県議会議員の先生方をはじめ、多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、ここに岐阜県立国際園芸アカデミー卒業式を挙行できますことは、誠に大きな喜びでございます。皆様方には平素から本校の教育に多大なご支援、ご協力を賜っておりますことに、この場をお借りしまして改めて厚く御礼申し上げます。

さて、皆さんは二年前に、園芸を生涯のなりわいとすべく、大いなる志を胸に入学してこられました。今、この日を迎えるにあたって、このキャンパスで学友と過ごした間の楽しかったことや苦しかったことなど色々な思い出がめぐってくると思います。共に学んだ友人、キャンパス、時間など、その思い出はお互いの人生にとってかけがいのないものです。その経験やここで得た人と人のつながりは、きっとこれからの人生にとって大切な糧となることを願っています。そして、ここで学んだことを誇りとして自信をもって生きて行ってください。

ところで、皆さんが入学された際に、私が入学式の式辞で述べた、シェークスピアの戯曲のなかに出てくる「正しくあれ、そして恐れるなかれ」という言葉を覚えておられるでしょうか。この言葉の意味するところは、失敗を恐れず、正面から向かい逃げるなどという意味でした。皆さんは在学中に素直な気持ちで恐れることなく、いろんなことにチャレンジできたでしょうか。きっとそのことを各自が認識し、すばらしい学びの経験をされたと確信しています。

ここで社会への門出にあたり、手元にも示しました、これから述べる先人の言葉を捧げたいと思います。

その言葉は、「志を立てて以て万事の源と為す。」（野山獄にて・土規七則から）です。これはちょうど今、NHKの大河ドラマで放映中の吉田松陰が獄中から元服する従弟に武士としての心得として書き送った七カ条の最後の締めくくり

の言葉の一部です。今ここにいる卒業生のほとんどが二十歳だと思しますので、まさに皆さんに送るぴったりの言葉です。「志を立てることから、すべては始まる。」という意味で、逆に言えば、志がなければ何も始まらないということです。志があればやる気もわいてきて、意気込みがあれば目標が遠くにあってもたどりつけないことはなく、難しくてもできないということはないはずだという意味です。皆さんは2年前にこの学校に入学されて来られた際に、誰しも将来このようになりたいという夢、志を抱いて入学されて来られたと思います。今、世の中の若者が夢を持たなくなっていると言われていますが、この学校に入ってきた皆さんはそんなことはないと思います。花や緑に興味をもち、人々に癒しや感動をもたらしたいと思って入学して来たと思います。これから社会に出て、色んな苦難が待ち構えていると思います。その苦難に遭遇した際に初志を振り返り、自らが目指した仕事に誇りを持ち乗り越えて行つてほしいと思います。

昨年、国では花の振興に関する法律が成立・施行され、それを受けて、岐阜県では全国に先駆けて、花の振興に関する条例が制定、施行されました。花産業と花の文化の振興を図り、花で彩る「清流の国ぎふ」を目指しています。それには期待される皆さんの若い力を必要としています。

ここに卒業を迎えられる皆さんは、それぞれが大きな仕事ができる秘めたものを持っています。その潜在する能力を最大限に発揮できるかどうかは、皆さん自身にあります。これからは現場での仕事を通して自らを高め、自立して行くのです。そこに人生の楽しみは必ずあるはずです。現状に満足することなく、自分の能力と感性を信じて上を目指してくれることを心より願っています。

最後にあたり、ここにめでたく皆さんが卒業を迎えられるのは、日頃の努力のたまものであるのはもちろんですが、同時に周りで支えてくれたご家族と教職員のお陰でもあることも伝えておきたいと思います。その感謝の気持ちを忘れず、それに報いるのは、これからの人生において社会に還元してゆくことに他なりません。そのことをくれぐれも忘れないでください。

以上、皆さんの将来に幸多きことを祈って、はなむけの言葉といたします。

平成二十七年三月吉日

岐阜県立国際園芸アカデミー 学長 上田善弘